

# 大阪文化への期待 羞じらいの文化に光を

—— 帝塚山派文学学会設立を祝して ——

木津川 計

## 四季派学会を発足させた小久保実

ご紹介いただきました木津川でございます。

ここにお越しの皆さんの多くは小久保実という方をご存じのことと思います。しかし、小久保さんは地味な文学評論をもつぱらにしてこられた現代文学の研究者でしたから、広く一般には知られなかったのです。

のっけから申し上げる小久保実さんは堀辰雄の研究者として多くの著作で業績を残されました。堀辰雄だけでも八冊の著書を残しただけでなく、立原道造や福永武彦、中村真一郎など堀辰雄に影響を受けた作家の研究でも著作を残された方でございます。

小久保さんは大正一二年、大阪に生まれ、関西大学大学院修士課程修了後、商業高校の教師を振り出しに、昭

和五二年、帝塚山学院大学教授に就任、平成二三年、八七歳で亡くなりました。

なぜ冒頭、小久保実さんの話を申し上げたかと言いますと、昭和六二年に「四季派学会」が発足した、その発案と設立に当たったての中心的役割を果たされたのが小久保さんだったからであります。

『せびゆるす』という文芸誌が小久保さんの追悼を組んだとき、ご存じの詩人・杉山平一さんが追悼のトップに「小久保実さんの思い出」と題してこう書かれたのです。

小久保実さんは私にとっても忘れられない人である。

小久保さんは特に堀辰雄の世界を深く理解し、いくつかの著書がある。堀辰雄の『風立ちぬ』『かげろふの日記』『菜穂子』など、それぞれについての論考があり、堀文学研究の第一人者である。堀文学と小久保さんの関係は絶ちがたい。(堀さんの)没後、堀さんを擁護した人でもあった。

小久保さんは(文芸誌)『四季』とも関係があり、四季派の会で、会長のなり手がいない時に、私は小久保さんの柔らかい誘いに乗り、つい会長を引き受け今に至っている。

小久保さんは地味な方で陰に陽に大変お世話になりました。

であります。

お聴きのように小久保さんは四季派学会を発案され、杉山さんに四季派学会の会長を要請、引き受けてもらったのち、学会の顧問になり、学会事務局を帝塚山学院大学小久保研究室に置いたのです。

実に今日に続く四季派学会は帝塚山学院大学から始まったのです。しかも初代の会長を長く務められた杉山平一さんは昭和四一年、帝塚山学院短大の教授に就任、昭和六二年、七三歳で退職されましたが、のちも帝塚山学

院大学の講師として平成八年まで、都合三十年間、帝塚山学院の教壇に立たれたのです。

四季派学会の設立に帝塚山学院は直接関わってはいませんが、本日設立される帝塚山派文学学会は学校法人帝塚山学院が学院創立一〇〇周年記念事業として発足させるものであります。実に帝塚山学院が直接的、間接的に二つの文学学会の設立に寄与され、また寄与されようとしていることに深い感銘を覚えるものであります。

なぜ帝塚山派文学学会の設立に際し、四季派学会に触れるのか、と申しますと、堀辰雄は勿論、四季派の初期を担った詩人、作家たちの資質と作品の傾向が、帝塚山派と目される一群の作家に共通するからであります。

## 堀辰雄と四季派の詩人たち

詩を基調にした文芸誌『四季』は昭和八年、堀辰雄によって創刊されましたが二年目に当時新進気鋭の詩人・三好達治と丸山薫を共同編集者に迎え、若手の詩人・津村信夫と立原道造を起用する他、昭和一〇年代の抒情詩人を結集し、昭和一九年の終刊まで八一冊を発行した文芸誌であります。

堀辰雄がなぜ『四季』を創刊したのかと申しますと、昭和に入ってモダニズムやプロレタリア文学の影響が強く、そこへ始まった十五年戦争によるプロパガンダなどの洪水から詩の抒情性と音楽性を守ろうとしたことにつながっていたのです。

堀辰雄は戦争のさなかドイツ近代の代表的抒情詩人リルケの翻訳、研究を『四季』の中で続けるなど、時流に超越して芸術の純粹を貫こうとした作家であり、詩人だったのです。

しかし、『四季』が大きくなるにつれて、モダニズムからアナキズム、日本浪漫派までも含むようになり、

三好達治までが激烈な戦争詩を書くなど、時局の流れに抗し切れなかったことが、戦後批判され、四季派のレツテルを貼られると「肩身を狭くした」と杉山平一さんも書いたのです。

折しも小野十三郎の「短歌的抒情の否定」が喧伝されている頃です。詩の抒情性を守ろうとした堀辰雄までが戦争責任追求の檜玉に挙げられたのですが、堀辰雄ほど「およそ戦争に縁のない人物」はいなかったと杉山平一さんは四季派への批判を反批判したのです。

やはり四季派の主流は堀辰雄は無論、みんな平和主義者でやさしかったのです。  
丸山薫は詩「汽車に乗って」でこううたいました。

汽車に乗って

あいるらんのやうな田舎へ行かう

ひとびとが祭の日傘をくるくるまはし

日が照りながら雨のふる

あいるらんのやうな田舎へ行かう

また、立原道造は詩「夢見たものは……」で

夢見たものは ひとつの幸福

ねがったものは ひとつの愛

山なみのあちらにも しづかな村がある

明るい日曜日の 青い空がある

そして、戦争詩を瑕瑾としますが、「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪降りつむ。次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪降りつむ」の三好達治は詩「乳母車」でこう詠んだのです。

母よ――

淡くかなしきもののふるなり

紫陽花いろのものふるなり

はてしなき並樹のかげを

そうそうと風のふくなり

時はたそがれ

母よ 私の乳母車を押し

泣きぬれる夕陽にむかつて

隣々と私の乳母車を押し

まだ続くこの詩は中之島公園に詩碑として刻まれているものであります。三好達治は大学生の頃、コンパの帰り、野菜を積んだ荷車を主人が引き、その妻が押すのに出会い、達治は泣きだしたといふのです。「酒を飲んで歌をうたって、こんなことをして、いいのだろうか」と言って泣いたことを杉山平一さんは『詩と生きるかたち』の中に書いています。

その杉山さんは詩『帰途』でこう歌ったのです。

夜の電車にのりこんできた

工場労働者

けさ 働く意志のつまってゐた

その心の弁当箱はカラカラはずみ

帰りゆく夜の家庭を思う

幼な児らすでに寝入りたるや

(中略)

観劇帰りの人よ

立って

席をゆづれ

明日 きみらがまだ床にあるとき

早くも冷い朝風をきって仕事へいそぐ人に

立って

席をゆづれ

## 杉山平一——最後の四季派と帝塚山派

お聴きのように杉山さんの詩を貫いた詩精神は、貧しくひたむきな人たちへの思いやりでしたから冷酷な世の中で傷つき、こころ病む人たちを慰め、励ましたのです。

杉山さんは生涯をかけて健気なものに感動し、敗北するものに涙しながら、しかし、希望を歌い続けた詩人でした。九十歳で出された詩集『青をめざして』に「マッチ」という詩があります。

アンデルセンの少女のように

ユメ見ることのできるマッチを

わたしは まだ何本か持っている

九十歳にして詩藻を枯らさず、みずみずしい感性を保ち続けた方でした。やはりこの詩集で詠まれた「純粹」という一行詩をご紹介します。

雪の純白は 山の高いところにしか住めない

こんな平易な短いことばでものごとの本質を言い当てたり、人間の真実を衝いたヒューマンな詩人は三年前の平成二四年五月、肺炎により亡くられました。九七歳でした。

その詩を悼み、私はレギュラーで担当しているNHKの「ラジオエッセイ」で次のように追悼したのです。

長い抒情詩の列がとぎれとぎれになる。その最後をゆつくり歩いてきた杉山さんが、ついに姿を消したのです。不在になってこの国の抒情詩は終焉を迎え、日本の近代詩の最終幕が降ろされたのです。

かつて三好達治は、わずか二四歳で亡くなった立原道造の才能を惜しみ、次の追悼詩を贈りました。

人が詩人として生涯をはるためには

君のやうに聡明に 清純に

純潔に生きなければならなかった

そして君のやうに また

早く死ななければ！

であります。私はこの詩を次のように書き変えて杉山平一さんに捧げるのです。

人が詩人として生涯をはるためには

あなたのやうに聡明に やさしく

清潔に生きなければならなかった

そしてあなたのやうに また

長く生きなければ！



私事にわたります。杉山平一先生、大阪文化圏の中で私は沢山のことを長年お教えいただいたのです。いま私は大きな空虚感とともに、まだ茫然であります。

私の送ることばでございました。なぜ杉山平一についてかくも述べたのかと申しますと、杉山さんだけが堀辰雄の『四季』につながり、さらに帝塚山派の重要な一人でもある、ということは両派をつなぎ、橋渡しする唯一のキー・パーソンだからであります。

もつと言うなら、帝塚山派と目される作家のことごとくが不在であることを思えば、杉山さんは「最後の四季派」にとどまらず、「最後の帝塚山派」として格別の位置を占めているのです。

## 帝塚山派の作家と作風

それでは杉山さんに先立った帝塚山派の作家たちは何を描いたのか。この点についてはこのあとのシンポジウムで、そしてこれからの研究で明らかになり、深められることでしょうからざっと一望するものであります。

一群の作家の中でも私は童謡「サッチャン」を作詞した阪田寛夫に注目してきたものであります。杉山平一、そして庄野英二と並ぶ優しい眼差しの作家として、いかにも帝塚山派らしいヒューマンな作風、そして控え目な物腰にこの人の純情を見るのです。

阪田さんのご両親は熱心なクリスチャンでした。会社経営者だったお父さんは、生涯に教会を三つも建てて伝道にも尽くされました。

お母さんはキリスト教系の大阪女学院を出られ、主婦業の傍ら奈良の教会でオルガン奏者として奉仕活動を続けられました。

やがてお母さんは膀胱ガンになり、入退院を繰り返します。お父さんは十一年前に亡くなりました。病むお母さんの看病に家族のみんなが献身する。阪田さんは神に祈るのです。「何か最後に母に喜びを与えてください」。そして「私はもう神を否定するようなことを喋ったり、書いたりいたしません」と誓うのです。

ですが、お母さんは咽喉に痰をつめたのです。苦しいのでしょうか。目を大きく見開いたままです。「枕元の看護婦が『もうお休みね』と臉を閉じると、ほとんど同時にさっと身をひるがえすように掌がつめたくなり、もう振り返っても母はどこにもいなかった」でお母さんを描いた小説『土の器』は終わるのです。

お母さんは阪田さんに教えたのです。土の器としてのなげない日常の中に、神から与えられた宝としての信仰と奉仕のよろこびがあるということを、であります。この『土の器』で阪田さんは芥川賞を受賞されました。

この作品の解説で作家・庄野潤三さんはこう書かれたのです。

芥川賞の発表のあつた晩、外出先の劇場で知らせを受けた本人から電話がかかった。いつも静かに話す彼が一層ピアニッシモになり、私たち家族全員が受話器の前で唱える万歳を無言で聞いていた。

であります。阪田さんの控え目でつつましいお人柄がよく察せられます。その阪田さんは平成一七年三月、七九歳で亡くなりました。教会での葬儀で弔辞を読まれた作家の三浦朱門さんはこう言われたのです。

君は天国でも道端の野の花としてひっそり咲いていることだろう。

胸を打つ弔辞だと思います。昭和五八年の毎日出版文化賞に輝いた著書『わが小林二三——清く正しく美しく』を阪田さんは私にサイン入りで贈ってくださいました。阪田さんこそまぎれもなく「清く正しく美しく」生きてこられた生涯だったのです。

阪田さんは作家になる前、朝日放送に勤め、童謡番組を制作しておられました。そのときの上司が庄野潤三さんだったのです。

庄野さんは昭和三〇年、『プールサイド小景』で芥川賞を受賞されました。幸せな中流の夫婦にひそむ危機を繊細で水彩画のような清潔な筆致で、しかし人間の内面を鮮やかに照らし出した作家でした。

庄野さんの短編に小品ながら人間の運命を描いた『相客』という作品があります。

戦犯容疑で巣鴨プリズンへ護送される兄に付き添う弟の兄弟愛の物語です。兄は戦争中、ジャワ島の捕虜収容所で所長に次ぐ副官だったのです。兄は心優しい人で捕虜を虐待したりする人間ではありません。しかし立場上、過酷にならざるを得ない、そんな日があったかもしれません。いやいや、そんなことのできる兄ではないとまた思うのです。

汽車の中には護送する二人の警察官に兄と私、それにもう一人相客がいたのです。その人はスマトラの飛行場で大隊長だった人です。ある日、アメリカの戦闘機が飛行場に不時着した。乗組員を捕虜にしたのですが逃げようとしたので処刑した。そのときこの相客の大隊長は軍の所用で十日ほど飛行場を不在にしていたのです。

処刑の命令を下したのは自分ではない。しかしそれを立証する方法がない。何という運の悪い人だろう。重苦しい希望のない気持ちになり、「この人は助からないかも知れない」と弟は思ったのです。ということは、兄は助かることを暗示しているのです。

## 庄野英二が形成した帝塚山派

この兄こそ庄野潤三さんの兄の庄野英二さんだったのです。その英二さんに『アレン中佐のサイン』という短編があります。

その中の主人公・椎崎大尉は英二さんとおぼしき人物で捕虜収容所の所長です。日本が敗戦国になり立場が逆転した。捕虜たちは勝者になり、自分たちの原隊に戻るべく十台のトラックに分乗したとき、捕虜代表だったアレン中佐が椎崎大尉に握手を求め、あなたの手帳とペンを貸してほしいというので貸しますと、手帳に次のことばを書き、サインしたのです。

椎崎大尉とその部下たちは、われわれ連合軍捕虜を保護するために、極めて困難な状況下でありながら終始誠意をもってあらゆる限りの力をつくしたことを証明する。

一九四五年八月三十一日

メエルモウチヨ捕虜収容所

捕虜代表 アレン中佐

そして中佐はさらにこう言ったのです。

もし将来、戦争中の日本軍の捕虜取扱いについて連合軍より訊問されることがあった時には、この証明書が役に立つでしょう。

実際、この証明書が役に立ち、庄野英二さんは釈放されたのです。収容所のあったジャワ島で庄野さんは従軍作家だった佐藤春夫と毎日のように友好を深めていました。英二さんの人柄を熟知した佐藤春夫はマッカーサー連合軍総司令官に助命嘆願書を書きました。この役割も大きかったといわれるのです。

庄野英二さんはこういう方だったのです。

その英二さんには日本エッセイストクラブ賞を受けた『ロッテルダムの灯』という胸に沁みるエッセイがあります。朝鮮戦争に参戦した一人のイギリス兵が一切の記憶を失って故国へ帰る話です。ただ一つ思い出せるのは、朝鮮に向かう船からの夜のロッテルダムの灯だったのです。

人がたつた一つの思い出と共に生きていくには美しい光景でなければ耐えられないのです。庄野英二さんにはまた『星の牧場』という児童文学の秀作があります。戦争で失ったツキスミという愛馬と戦後、幻想の中で再会する泣きたくなるような物語です。戦争への批判もこめた『星の牧場』は日本児童文学者協会賞、サンケイ児童出版文化文学賞他いくつもの賞を受賞しました。

この庄野英二さんが帝塚山学院大学の学長になられたのです。ヒューマンな作風の作家が多く帝塚山学院に集まったのはこの庄野さんの引きによるところが大きかったです。

たとえば、帝塚山学院短期大学の学長になったのは聴く人の心をほのぼのとさせたNHKの放送ドラマ「お父さんはお人好し」の作家・長沖一でした。

長沖さんは英国型の紳士で含羞の美学を心得た人でした。その長沖さんと終生の友だったのが藤澤桓夫だったのです。

## 藤澤桓夫——帝塚山派の中心

生涯に二〇〇冊もの作品を残した藤澤さんについては今年の三月、顕彰碑完成記念イベントで私が「藤澤桓夫と大阪の文学、文化」(『上方芸能』一九六号に全文掲載)と題して講演しましたので僅かを申し述べます。

藤澤さんは戦中から戦後、昭和二十年代まで大阪で大活躍した作家でした。のちの司馬遼太郎の存在の作家だったのです。ことに代表作『新雪』は二組の若い男女の、清潔で純白な新雪のような恋を描いて、太平洋戦争下の若者の心をとらえたのです。

出版社の育たなかった大阪ですから文壇も形成されなかったのです。唯一文壇らしきものは藤澤邸での藤澤サロンでした。昨年亡くなった評論家の大谷晃一さんが『大阪学文学篇』でこう書いておいてです。

(藤澤さんの)書齋へ文学者が出入りした。小野十三郎、長沖一、秋田実、吉村正一郎、織田作之助、今東光、五味康祐、司馬遼太郎、庄野英二、庄野潤三、足立巻一、杉山平一と、指を折れば限りがない。大阪で文学を志して此処へ来なかった人は少なからう。(中略)だが、藤澤さんは手下を従えて権勢を振るったわけではない。サロンの主人を務め、面倒をみただけである。

これだけではありません。私を知るだけでも山口瞳、田辺聖子、吉田留三郎、阪田寛夫、川柳の橘高薫風らが藤澤桓夫を慕って集まってきたのです。

まさに大阪文学圏の中心的人物としてその存在と役割は大きかったのですが、藤澤桓夫を今日知る人は大変少なくなつたのを残念に思ってきたものであります。

文芸評論家で芸術院会員だった山本健吉は大阪および大阪出身の作家の特徴をかつてこう言ったのです。「郷土をのしり、さげすみ、それでいて郷土に執着する」であります。的確な捉え方だったというべきです。この指摘を受けて私は『上方芸能』一七一号（二〇〇九年三月）でこう綴ったのです。

先に挙げた一群の大阪の作家たちは、郷土をのしらず、さげすまず、こころ優しいメルヘンや人びとへの献身、ヒューマンな香りと繊細な心理描写で断然光っていたのだ。この大阪の作家たちを私は堀辰雄の四季派になぞらえ、『帝塚山派』にとらえたい。

大阪はこれら帝塚山派の作家たちをさほど顕彰し、語ってこなかったのである。原色でどぎつく、品位に欠ける、そんな大阪像の氾濫する中で、私たちは大切に美しい文学をながしろにしすぎたのである。

自省をこめ、改めて帝塚山派への再評価を図らねばならないのだ。

であります。今から六年半前の反省と提言でございました。

この提言もまた情報の洪水に流され、見失われるのかと思っていましたら、幸いにも帝塚山学院の理事会が受け止めてくださったのです。そして学院創立一〇〇周年記念事業の一つとして本日「帝塚山派文学学会」を設立される帝塚山学院に心からの敬意を表するものであります。

なぜ敬意を払うのか。この学会の設立は帝塚山学院全体のグレードと評価を高めるだけでなく、眨められた大阪の都市格を引き上げるに大きな役割を果たすこと間違いないからであります。

## 貶められた大阪の都市格

実際、大阪の都市格は京都には遥か及ばず、神戸にも劣っているのです。大阪のイメージもUSJを除いてはけっして良くないのです。当然大阪人のイメージもゆがめられ、「gooooランキング」によりますと、「東京人に聞いた大阪人のイメージ」では漫才師と大阪人の区別もつけられていないのです。

こういうイメージです。「(大阪人の) 会話は常にボケとツッコミの応酬」であるとか「会話にオチがないと怒る」、あるいは「いつでもどこでもなんでも値切る」など、日常ほとんど見たこともない人物が大阪人一般、と東京人にはイメージされているのです。

藤本義一と丹波元さんによるPHP文庫『大阪人と日本人』という本は大阪人が広くどう捉えられているかをこう述べています。「ガラが悪い、下品、騒がしい、怖い町、せっかち、厚顔無恥、脂ぎっている、抜け目ない、ケチ、守銭奴、食い倒れ、際限もなく誉め言葉にならない表現を並べ立てられるのが大阪及び大阪人だ」であります。

この通りです。こういう低次元で、いわれなき見られ方を大阪が蒙りますのは、偏に大阪の都市格の低さ由来しているのです。

いったい都市格の水準はどういう条件のありなしと内容に因っているのかと申しますと、次の三つであります。①文化のストック、②景観の文化性、③発信する情報、の三つであります。

関西主力の三都市、京阪神でなぜ京都の都市格が一位なのかと申しますと、歴史と伝統の都市ですから①文化のストックが豊富なのです。加えて華道と茶道の都であり、また大学の多い学術研究都市でもあるのです。②の景観の文化性も満たしていて、眺めるに足る景観に恵まれています。③の発信する情報でも葵祭や祇園祭、大文



字の他、吸引力を持った魅力の情報を多く発信しますから一位に位置づけられるのです。

では、神戸がなぜ二位なのか。神戸は幕末まで小さな漁村でしたから文化のストックは近代以降のものでして京都、大阪には及びません。しかし、六甲の緑、坂の街の北野町の異国情緒と夜景の美しさ、それにミナト神戸という②の景観の文化性に優れ、③の発信する情報でも若々しくお洒落な情報で憧れを強めるのです。

当然、大阪が三番手に位置づけられるのはなぜか。まず、文化のストックが貧弱なのです。一九七〇年代ですが、国立民族学博物館の館長だった梅棹忠夫さんが大阪を評してこう言ったのです。「これほどの大都市にして見るべき文化のストックの貧しい都市は世界的に見て珍しい。ひとこと言うなら大阪は下司の都市である」であります。その事情は今日も変わっていないのです

②の景観の文化性と申しまでも見るべき風景はごくわずかでしかありません。何より大阪は戦後、人びとの颯爽を買うようなロクでもない情報を発信し続けたのです。

五〇年代は芝居「がめつゝい奴」が大評判になり「がめつゝい都市」の印象を焼き付けました。

六〇年代の高度経済成長期は村田英雄の「王将」が大ヒットし、阪田三吉や、東洋の魔女、鬼の大松や「どてらい奴」のもーやん、「悪名」の朝吉親分などが活躍するほどに「ど根性都市」とみなされたのです。

七〇年代の石油ショックを契機に低成長になりますと、大日本どけち教教祖が登場し、恥かけ、見栄かけ、義理かけのどけち哲学を振りまくほどに「どけち都市」と言われたのです。

八〇年代に入るとグリコ・森永事件が起きました。さらに、数千人の老人をだました豊田悪徳商法が大阪発となるに及んで「犯罪都市」の烙印が押されたのです。

九〇年代に入ると、ひったくりNo.1をはじめ、あらゆるワースト記録が出そろったところへ横山ノック知事の恥ずべき破廉恥事件が引き起こされ、「破廉恥都市」と見下げられたのです。

二〇〇〇年に入ってから大阪から大企業が流れになって東京へ本社や本社機能を移す、いわば「流出都市」の様相を呈し、二〇一〇年代は橋下知事、市長の登場により「壊す都市」の印象を強めたのです。

こういう情報ばかりを発信して大阪の都市格が高まりましようか。大阪が尊敬されざる都市になるのは当たり前なのです。

## 大阪の文化類型と帝塚山派文学学会への期待

一口に大阪文化といわれますが、仔細に眺めますと四つの類型に分けられるのです。一つは都市的華麗な宝塚型文化、二つ目は土着的庶民性の河内型文化、三つ目は伝統的大阪らしさの船場型文化、四つ目は学術研究機能性の千里型文化、以上の四類型が全体として大阪文化を形づくるのですが、広く社会化しているのは二つ目の河内型文化でして、これだけが大阪文化と思われているのです。

正しい大阪観のためには、河内型文化以外の三つの類型に関わる情報発信を強めねばなりません。それだけでなく、私は五つ目の類型を新たに措定することによって大阪のイメージチェンジを図っていかねばならないと考えるのです。その五つ目の類型をこそ「帝塚山型文化」と呼びたい。その性格は優しさと羞じらいであります。

実に大阪は、優しさと羞じらいの文化を内在させているながら、そうした文化のつくり手がみんなピアニッシモで控え目であったため私たちは長い間気付かなかったのです。

本日、帝塚山派文学学会が設立されたことよって、優しさと羞じらいの作家たちに脚光が当てられたのです。その作家たちはにわか再評価にとまどい、身をすくめて小さくなっていることでしょう。それだけに手荒に扱

つてはいけない。敬愛の眼差しで静かに見上げたいのです。

さて、設立される帝塚山派文学学会に要請したいことが二つあります。その一つは何か、およそ学会なるものの閉鎖性であります。わけでも文学系の学会の密室性でありまして、いったいそこで何が論議されているのか、私どもは一切知らないのです。

たとえば、現にあるアメリカ文学会や日本独文学会などがどういう研究成果を挙げているのかは学会内部でしかわからないのです。

同様に帝塚山派文学学会が学会だけの活動に終始するならば、帝塚山学院のグレードアップには結びつかず、大阪の都市格向上にも寄与することはできないでしょう。

であればこそ開かれた学会にしていきたいし、その研究成果を広く世間に知らしめてもらいたいのです。そのためには、あるいは別の機関を構想せねばならないかも知れません。そういうことも含めて学院にお考えいただきたいし、私どももまた無関心であってはならないということでもあります。

もう一つです。帝塚山派文学学会はこれからの学会であります。研究者はごく少数しかいないのです。ですから若い研究者を育てる格別の手立てを講じねばならないのです。なりゆきまかせの学会員増ではなく、目的意識的に研究者を養成する課題がこの文学学会にあることにご留意いただきたいのです。

そういう努力が十年、二十年積み重ねられていく中で、忘れられていた優しさと羞じらいの文学が復権し、しだいにただけしくなっていく世の中で小さな輝きを強めていくのです。

## 含羞都市大阪に向かつて

かつて大阪は文化の都市であったこと疑いを入れません。元禄から享保の頃、大坂は日本で最も水準の高い町人文化の都市だったのです。優れた町人学者を輩出した都市でもあります。それは母体としての町人の教養も高かったことの証でもあります。

その「教養とは、まずハニカミを知る事也」と太宰治は申したのです。さらに「文化にルビを振るとしたらハニカミである」とは太宰の確信だったのです。

いま、ますます進行する大阪の「地盤沈下」をどう浮上させるか、の問いに劇作家の山崎正和さんは「文化を大事にしないとイケません」と一昨日の朝日新聞で言われたのです。

その通りです。再び大阪を文化都市に再構築するということは、太宰治を援用するなら文化はハニカミ、難しい言葉で言うなら「含羞」であります。すると大阪を再び文化都市に、ということとは再び含羞都市を目指すという事に他ならないのです。

そういう今、帝塚山派文学学会が設立されますのは、優しさと羞じらいの文学、言いかえるなら優しさと含羞の文学の復権は、文化都市、即ち、含羞都市を再び取り戻す大阪のこれからの課題と結びついているのです。ここに帝塚山派文学学会の発展の可能性があることに私たちは確信を持ちたいのです。

「がめつい都市から含羞都市に」は私の積年の願いであり、雑誌『上方芸能』の主張でもあったのです。伝統芸能を守り、発展させ、大阪に文化を甦らす、それを目的に私どもの雑誌はいささかの役割を果たしてきたと僭越ながら申し上げるものであります。

しかしながら財政的に大変困難になったことが一つ、もう一つは私が八十歳の高齢を数えたことと重なって、

来年五月に発行します二〇〇号、創刊満四八年をもって終刊することをこの十一月五日に発行する一九八号で公表するものであります。

来年五月、『上方芸能』が退場する、その月に帝塚山学院創立一〇〇周年記念パーティーと記念シンポジウムが開かれるのです。それは設立されたばかりの帝塚山派文学学会の発展に弾みをつけることになっていきましよう。

ゞがめつい都市から含羞都市にゞを目指した『上方芸能』は退場しますが、いわば入れ替わりに生まれたような帝塚山派文学学会が私どもの希望を受け継ぎ、この大阪を理想的な文化都市、即ち、理想的な含羞都市に再構築していただくさるだろうと期待するものであります。

早稲田大学の校歌が歌います。「集まり散じて人は変われど、抱くは同じき理想の光」と同じように、大阪文化圏に登場するもの、退場するものが共に抱きますのは、ゞがめつい都市から含羞都市にゞの理想の光であります。

どうか皆さんのお力を生まれたばかりの帝塚山派文学学会にお貸しください、この若々しい学会の発展にご助力くださいますことを願ひ上げ、私の拙い話を終えさせていただきます。ありがとうございます。